資　料

第29回水素エネルギー協会大会報告

坂田　興

財団法人　エネルギー総合工学研究所

〒105-0003　東京都港区西新橋1-14-2

1.　はじめに

第29回水素エネルギー協会大会は、2009年12月3～4日の二日間にわたり、タワーホール船堀（東京都江戸川区）で開催された。本稿では、この大会の概要および今後の展望に関して述べることにする。

2.　第29回水素エネルギー協会大会の概要

今回の大会における発表数は、両日併せて特別講演2件、口頭発表31件、ポスター16件であった。事務局調査によると参加登録者数は178名にのぼり、全ての口頭発表およびポスター発表に対しては、活発で率直な討論が行われた。特別講演では、京都工芸繊維大学の陣内先生から「ソフトマテリアル機能材料の3次元構造観察と解析」、東京大学の高田先生から「エネルギー変換型光触媒の開発動向」と題する最先端技術動向のご紹介があり、参加者に感銘を与えた。

今回の大会に関わる数値を、過去5年間の大会と比較をしてみた（表1）。

表1.　大会発表数および参加者数の推移[1)]

大会	会　期	特別講演	発表数	参加者数	協賛会員[2)]
25回	2005/12/14-15	2	50	182	29
26回	2006/12/14-15	2	53	155	28
27回	2007/12/6-7	4	40	180	36
28回	2008/12/11-12	3	62	207	30
29回	2009/12/3-4	2	47	178	42

1) 水素エネルギー協会事務局による調査結果

2) 参加者数の内数

協賛：エネルギー・資源学会、（社）化学工学会、（社）自動車技術会、（社）電気化学会、（社）日本エネルギー学会、（社）日本化学会、（社）日本機械学会、（社）日本生物工学会、（社）石油学会

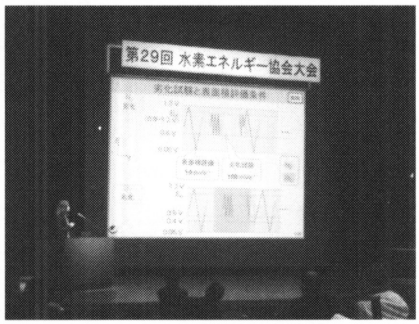
発表数および参加者数に関しては、従来の傾向と大差ないが、協賛会員の参加は、増加しているように思われる。水素エネルギーシステムが総合技術・工学システムであることを勘案すると、協賛会員の参加数増大は好ましい傾向である。大会が、関係者のハブ的な機能を果たすことができれば、大会も一層意義深いものになると考える。

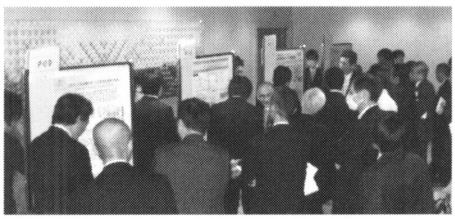
3.　大会をめぐる外部要因と今後の展望

地球温暖化対応の世界的政治問題化が、今回の大会の背景にあった。大会直前の11月11日には、国際エネルギー機関(IEA）がWorld Energy Outlookを公表し、脱炭素技術の進展を呼びかけた。12月7～19日にはコペンハーゲンで気候変動枠組条約第15回締約国会議（COP15）が開催されたが、京都議定書以降の枠組みに関して合意形成ができず、地球温暖化をめぐる協議の厳しさが顕在化した。

我が国の国家プロジェクトの成果を受けた産業界の積極姿勢も大きな要因であり、家庭用燃料電池の市販開始と燃料電池自動車の一般ユーザーへの普及を目指す意向の発信にそれが現れている。

水素エネルギー協会大会が、上記の短中長期のシナリオ策定、技術開発および技術評価を軸とした産官学の交流の場となることを期待している。





【大会風景：口頭発表（上）、ポスター発表（下）】